ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

「そこだっ！」

　その声と同時に、炎の攻撃が、まるで樹木の魔物のようなポケモン、オーロットに命中する。木に一つ目がつき、二本の腕と多脚が生えたそのポケモンは、その攻撃を受けると、途端に背中を向け、逃げていく。

　だが、オーロットを追い払ったトレーナー、雅也とそのポケモン、ヒトカゲは、安心することもなく、後ろを振り返った。そこには、彼のポケモンであるフシギダネやゼニガメの姿があり、さらに三匹のオーロットが腕を振り上げて、唸り声をあげて戦闘態勢をとっている。

　雅也がヒトカゲに攻撃の指示を出す寸前に、一匹のオーロットが突然姿を消した。『ゴーストダイブ』という技だ。姿をくらまして、敵の死角に現れては攻撃するというその技は、厄介極まりない。

　しかしそれは勿論、この技を受けるのが初めてなら、という話である。

　今日この技を見るのはこれで八回目の雅也達にしてみれば、流石に対処するのも簡単なもので、わざと死角を作って攻撃を誘っては、攻撃するために繰り出してきたオーロットの腕の一撃をゼニガメの背中の甲羅で受け止めて、ヒトカゲがその隙に攻撃を繰り出す、といった戦術で対応していた。フシギダネは、その間、他のオーロットの相手である。

　こんな感じでオーロットの相手をしている雅也達だが、彼等は別に、突然野生のオーロットの群れに襲われたわけではない。雅也の方が、強そうな野生のポケモンを見つけては、片っ端にバトルを吹っかけているのだ。当然、こんなことをしているのには訳がある。

　最近、道場にいる仲間達だけでなく、太一や神楽とも一緒にポケモンバトルをするようになった雅也なのだが、実は二人を相手にした時の勝率はあまり芳しくない。どちらも大体、四割五分程度といった所だ。まぁ、ほぼ五割……と言ってしまえば聞こえは良さそうだが、雅也にも長年ポケモンバトルの修行をしているというプライドがある。割と同じような年齢から修行を始めた神楽ならともかく、最近本格的な修行を始めた太一に対してこの勝率なのは、雅也としてはちょっと納得がいかないのだ。先輩として色々教えてあげたいと思っていた雅也の方が、逆に太一から教わっている始末。

　そういうわけで、野生のポケモンを相手に特訓をすることにしたというわけである。別に対人戦でも特訓するのには一向に構わないのだが、急成長した風を装いたい雅也は、戦う相手に野生のポケモンを選んだのだ。特訓をするのは、主に修行が休みになる日曜日。流石に日々の師匠からの修行メニューをサボるわけにもいかないので、毎日野生のポケモンを相手出来るわけではない。修行内容によっては野生のポケモンと戦うことも勿論あるわけだが、ここら辺に、そうそう強い野生のポケモンが生息しているわけでもなく、ほとんどが、出会ったばかりの頃のゼニガメやヒトカゲ位の強さだ。そのため、雅也達的にはちょっと物足りない。

　一ヶ月程かけて探した結果、一番特訓する相手に最適だったのが、ここ、山に生息しているポケモンである。探すのに時間がかかったので、実際に特訓をしたのは、今日で三回目だ。明日からは雅也は夏休みに入るので、日々の修行のスケジュールも変わる。一週間の合宿があるとは言え、その後は週二日の休みが入るため、特訓する回数ももっと増やせるだろうと雅也は思っていた。

　ちなみに、どんな『山』なのかと言うと、『雅也がおっことされてキャッチされた山』とでも言えば、お分かりになるだろうか？　そう。雅也がジャックと戦った、あの山である。

　オーロットの群れを倒した雅也達は、少し休憩をするために、近くにある岩に腰掛けた。息を吐きながら、雅也は空を見上げる。木の葉が空を覆いかけている中で、雅也は頂上の辺りを見つめていた。

「山ってさ」

　雅也は、木の実を採って食べているフシギダネ達に話しかける。

「何か変な場所だよね」

　三匹のポケモンが、動きをピタリと止める。そして怪訝そうな顔で、雅也を見上げた。もしルカリオのように言葉を話せれば、何を言っているんだろう、とでも言ったであろう。

　全く気にする様子もなく、雅也は続ける。

「ジャックに殺されかけた場所なのに、全然『こわい』って感じがしないんだ。フシギダネと会った場所だからかな？」

　そんな事を聞かれても、ジャックと会ったことすらないフシギダネ達が分かるはずもない。雅也もそう思っているのか、明確な反応を返して欲しいと思って聞いた訳ではなさそうだった。フシギダネ達が採ってきた木の実の内、一つを手に取って齧った雅也は、再び頂上の辺りを見つめる。それを見て、フシギダネ達も、何事も無かったかのように食べることを再開した。

しかし実際、雅也はこの山に足を踏み入れる時――ピカチュウやルカリオも含め――全く何の躊躇いも無かったのは事実だ。山に入ってから、三合目あたりでようやく、あぁそう言えばと、ジャックに突き落とされた場所だと気が付いた位である。

　ジャックに殺されかけた事は、今も雅也、ピカチュウ、ルカリオの記憶に鮮明に残っていた。しかし、そこから道場に生還した後から今日までずっと、彼等が『恐怖』というものを感じたことは一度もない。感じているのは、何と表現したら良いか分からない『モヤモヤ』だけだ。

　この『モヤモヤ』に関しては、雅也もピカチュウもルカリオも、未だに何なのか答えは出せていない。まぁ元より何なのかなんて、もう一度ジャックと戦えば分かるだろうと思い、彼等は真剣に答えを出そうと努力した訳ではないのだが。

　木の実を食べ終わった所で、雅也達は再び野生のポケモンを探しに行こうと歩き始める。

　その時だ。

　同じように歩き始めたフシギダネ、ゼニガメ、ヒトカゲが、ピタリと動くのを止めた。そして、体をブルっと震わせたかと思うと、急に全身が光り始める。

「あっ！」

　その様子に気が付いた雅也は、慌ててポケットの中を探る。カメラか何かが無いかと思ったのだが、生憎戦いの邪魔になるような物は持ってきていない事を思い出し、やってしまったと肩を落とす。

　それでも、雅也の心は喜びに震えていた。

輝きに包まれた三匹は、その体の形を少しずつ変えていく。フシギダネの背中の種は蕾のようになっていき、ゼニガメは頭に羽のような耳を生やす。尻尾は光りのシルエットではまだ分からないが、フサフサとした見た目になっているようだ。ヒトカゲは、頭の後ろに角のような突起物が出来ていた。全体的に、体も少し大きくなっている。

三つの輝きが同時に弾けると、そこには、新しい三匹のポケモンがいた。

背中の種が蕾になった、たねポケモンのフシギソウ。

体の色が全体的に濃くなった、かめポケモンのカメール。

同じく体の色が濃くなった、かえんポケモンのリザード。

「……やった！」

　進化した三匹のポケモンを見て、雅也は拳をギュッと握り締めた。

　この時、まさか今日が厄日と言うのもはばかられる日になるなんて、雅也達は考えもしなかったのである。